

2015年8月16日礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 14章 25～33節

説教：私は王の顔を拝したい

1 アブシャロム

1) 王の顔を見てはならない

今日もダビデ一族のどろどろした人間関係の話が続きます。いったいどこに神の恵みがあるのかと思うかもしれません。ここにも神の恵みが隠されています。これからそのことを見て参ります。

ダビデの三男アブシャロムは、妹のタマルが兄であるアムノンからはずかしめを受けたと知り、兄を憎みます。二年間じっと待った末にアムノンを殺し、母親の実家に逃げ込みました。ダビデはイスラエルの王として、あるいは父として何らかのさばきをすべきところです。ところが彼は何もしません。そのままずるずると三年が過ぎてしまいます。側近のヨアブはこのことに心を痛め、なんとか状況を変えようと、一計を案じます。テコアから智恵のある女を連れて来て、ダビデの前で芝居を打つように言い含めます。「自分は夫を亡くしたやもめです。ふたりの息子がいたのですが、仲が悪くてあるときけんかをしてひとりがもうひとりを殺してしまいました。親戚が集まり、残った息子を連れて来い。あいつを殺すのだと騒いでいます。でも、ここで残った息子も殺されたなら、私はどうやってこれから生きてらよいか。どうか王さま。息子が殺されないように命令を出してください。」王は言います。「主は生きておられる。あなたの息子の髪の毛一本も決して地に落ちることはない。」これを聞いたテコアの女は、こう切り出します。「あなたは、追放されたままになっているアブシャロム

を戻していません。それでは、あなたが今言ったことと矛盾しているのではないか。」これを聞いたダビデ、さすがにぐうの音も出ません。すぐにアブシャロムをエルサレムに戻すことにします。しかしそのままという訳にはいきません。王とは今後一切面会できないということにします。アブシャロムは王子の地位を剥奪されたということです。

2) 非の打ち所のない容姿

ここから今日の箇所に入ります。25節から27節にはアブシャロムが非の打ち所のないほどにハンサムであったことと、娘のタマルも非常に美人であったとあります。よく見ると、24節では「アブシャロムは家に引きこもり王の顔を見なかった」とあり、28節でもう一度「王には一度も会わなかった」と続き、その間にはさまれるような形で、頭の髪の毛のことが詳しく書かれています。なぜここでこんな話が出て来るのかと不思議に思います。

この後アブシャロムは、父ダビデに刃向かって王の座を武力を持って奪い取るクーデターを起こします。ひとりではできません。味方が必要です。アブシャロムに魅力がなければ誰も来ません。今の時代のことですが、選挙のとき誰に投票するかをどうやって決めるのでしょうか。投票所に掲げられているポスターの写真を見て決める。そういう方が意外に多い。アブシャロムが非常にすぐれた容姿であった、ハンサムであったことが大きな魅力となって味方を増やすことになりま

す。このことがイスラエルに大きな悲劇をもたらすこととなります。そのことはまた次回に見ていくことになるでしょう。

2 私は王の顔を拝したい

1) 「二年後」

アブシャロムは王子としての地位を奪われました。当然ですがおもしろくありません。二年経ったときとうとう我慢ができなくなり、王に会えるよう段取りをつけてもらいたいとヨアブに二度も願いました。これが無視されると、ヨアブの畑に火をつけるという過激なことまでします。たまりかねたヨアブがアブシャロムのところに怒鳴り込んできたとき、アブシャロムはこう言います。32 節後半。「今、私は王の顔を拝したい。もし私に咎があるなら、王に殺されてもかまわない。」

殺されてもかまわないから、王に会わせてくれ。さすがのヨアブもこう言われて無視する訳にはいけなくなり、ダビデにこのことを伝え、王との謁見が実現しました。

ここで考えなければならないのは、なぜアブシャロムは王に会いたいと言ったのかです。それもヨアブの畑に火をつけるということまでして実現させようとする。何かそこには意図があると考えべきでしょう。

素直な方はこう思うかもしれません。実の父親に会いたいと思うのは子どもとして当然ではないか。火をつけるのはやり過ぎだが、それだけアブシャロムは、父に会いたいと強く願ったのだろう。

しかし、このことばに注目していただきたいと思います。28 節。「アブシャロムは二年間エルサレムに住んでいたが、王には一度も会わなかった。」ここに「二年間」というこ

とばがあります。二年間黙っておとなしくしていたが、二年経ったときに行動を起こした。このパターン、以前にもどこかにありました。13 章 23 節です。妹タマルがアムノンからはずかしめを受け、アムノンに憎しみを抱いてから「満二年たって」とあります。二年間黙っておとなしくしていたが、二年経ったとき、行動を起こしてアムノンを殺した。あのときと同じパターンがくり返されています。

寂しくなったので父親に会いたいと思ったという話ではありません。アブシャロムは何かをたくらんでいて、それであえて過激な行動に出ています。「もし私に咎があるなら、王に殺されてもかまわない。」殊勝なことを言っているようですが、アブシャロムは王が自分を殺せないということを最初から見透かしているのです。というのは、14 章 11 節の後半のダビデのことばがあるからです。

「主は生きておられる。あなたの息子の髪の毛一本も決して地に落ちることはない。」かつてテコアの女に語ったことばは、ダビデにも跳ね返ってきております。アブシャロムの髪の毛一本も決して地に落ちることはない。つまり、アブシャロムが殺されるようなことは絶対ない、と宣言したのと同じ。王が語ったことばは取り消すことはできません。王の口から語られたことばは絶対なのです。アブシャロムは、ダビデの約束を利用して、策略を巡らしていきます。

2) 王はアブシャロムに口づけした

アブシャロムの強引とも思えるやり方に、ダビデは不快感をもったはずですが、本心は息子と顔を合わせたくないということだったのかもしれませんが。それほど父と息子との間は冷え切っていました。とは言え、このまま

アブシャロムの要求を無視すれば、彼がもっとひどい事件を起こすに違いないとも感じています。王はしぶしぶアブシャロムを呼び寄せ、口づけをしました。

親子という親しい者同士が交わす挨拶の口づけではありません。もっと重い意味がありました。王がアブシャロムへの制裁を解き、王子としての地位に戻した。そういうことを現す儀式です。わかりやすく言うなら、ダビデは王位を継承する権利をアブシャロムに与えたということです。これは大きなことです。実は、これこそがアブシャロムの求めていたものでした。王位継承権を獲得したことにより、彼は大きな一歩を踏み出すことになります。着々と父のいのちをねらい、王座を奪い取るための計画を進めていきます。最初は誰も気がつきません。あるときダビデはアブシャロムの策略に気がつくのですが、もうそのときは手遅れでした。命からがら宮殿から逃げ出していくはめになっていくのです。

3 罪人のところに來られたイエス

1) 赦された恵みを見ようとしない罪人

兄アムノンが妹タマルをはずかしめたときも、アブシャロムがアムノンを殺したときも、そしてアブシャロムが実家に逃げ込んだときも、いつもダビデは自ら積極的に動いて問題解決にあたろうとはせず、むしろ優柔不断な態度しか取りませんでした。今日の箇所もそうです。息子から王に会いたいと強く言われると、そのまま言いなりになってしまう弱い父親の姿しか見えません。そんなことをしているうちに、結局ダビデは息子からのちを狙われてしまう羽目になる。愚かなダビデ、あの信仰深いダビデはどこにいったのかと思います。今日の箇所のどこに恵みがある

のでしょうか。

2) 刃向かう者に打たれるイエス

アブシャロムは、「あなたの息子の髪の毛一本も決して地に落ちることはない」とダビデが語ったことばによって救われました。けれども当の本人は、その恵みがわかっていません。かえって、自分の目的を達成するために、たとえ父親だろうが王であろうが最大限に利用してはばかりません。

そんな人を神はどのようにご覧になるのでしょうか。赦して上げたのに、恩を仇で還すような奴はもう赦さない。普通ならそう思うのでしょうか。しかし神はそうは思いません。ダビデを通して神の姿が浮き上がります。アブシャロムに王宮を追い出されても、されるがままになっていきます。アブシャロムを責めません。赦した相手に自分が殺されそうになったとしても、一度語ったことば、「あなたの息子の髪の毛一本も決して地に落ちることはない。」このことばを取り消そうとしません。

主も同じです。主は罪人である私たちの罪を赦すために人となって來られました。私たちの罪を赦した方を、人々はその恵みを知ろうともしないで、十字架に追いやりました。こうやって私たちは救い主を殺したのです。けれども、神は一度語った救いのことばを取り消すことは絶対にしません。あなたは救われました。一度そのように宣言されたなら、たとえアブシャロムのように赦されたことに感謝もせず、王のいのちを狙うほどにひどいことをしたとしても、なおあなたは殺されてはならないと言いつけてくださる。それが私たちの神なのです。

私は救われているのだろうかとき々不安

になる方がいます。こんなことをしてしまった私はもう神に見捨てられたに違いないと気落ちする方もいます。確かに罪にまみれた自分の姿を見れば見るほど神はますます遠く感じられるかもしれません。しかし神の救いはどんなことがあっても揺るぎません。アブシャロムはひどい男だと腹が立つでしょうか。それでもアブシャロムは救われています。おかしいと思いますか。不公平だと思いますか。そのことばは皆さん自身に跳ね返ってきます。私たちはアブシャロムそのものです。たとえこれはおかしい、不公平だと思つたとしても、一度語られた救いは取り去られることは絶対にない、それほど救いが確かなのです。

そして最後にもう一つのことについておきます。ここには弱いダビデ、無力なダビデが書かれています。息子にだまされ、追い出され、いのちを狙われるダビデがいます。情けないダビデだと思つたかもしれませんが、ここに十字架に追いやられていく主の姿があることを覚えたいと思います。